

#### ❖❖ 巻頭言 ❖❖

## 「秋夜の瞑想」

英語科 西山公紀

最近のベストセラーの中には、人類滅亡の危機や世界の終焉を予言する様な終末論的テーマを持った作品が少なくない。オカルトやパニックものが流行するのは世紀末の特徴の一つであるが、同時にこの事は現代人の不安と危機感の表われでもある。戦争・疫病・飢饉などによって、これまで幾度も人類は滅亡の危機に瀕して来たが、極限状況に生きた人々が「死」をどのように受け止め、その恐怖をどのように克服してきたかを探ることは興味深いことである。

中世ヨーロッパの人々を恐怖のどん底に突き落としたペストの大流行も、確かに人類最大の危機の一つであった。突然襲って来る「死」に対する恐怖が、人々の社会生活や精神生活に大きな衝撃を与え、その時代の思想や芸術にまで深い影響を及ぼしていったことは、容易に想像できる。もはや「死」が避けられないものと悟った時、人々はむしろ自分の方からそれに近づこうとしていった。つまり「死」を精神生活の中心にすえ、日常の生活の中でそれを愛好し始めたのであった。そんな中から「死の芸術」と呼ばれるものが誕生して来た。ホイジンガーは、彼の著書「中世の秋」の第11章の中でこの問題に触れ、文学や造形美術のテーマや表現対象として、この時代に「死」がいかに数多く取り上げられたかを論じている。また、もっとこの問題を読みやすくした本に「死の舞踏」木間瀬精三著（中公新書）がある。主に14世紀末から16世紀末までのヨーロッパにおける「死」の表現形式を取り扱ったもので、ペスト流行の詳細な記述や、この本の表題になっている「死の舞踏」の話などが興味深い。

1330年代に、おそらく中国の新疆省附近で発生したと言われるペストが、貿易路ぞいにインド・イランなどを経て海路イタリアに運ばれ、そこから全ヨーロッパへ広がっていった。この伝染病になんの抵抗力も持たない中世ヨーロッパの人々に、この世の終りを感じさせる程の猛威をふるい、その死亡率は70%近いとも言われた。1348年にフィレンツェ市で5カ月間で約10万人の死者を出し、さらに1665年のロンドン大流行の時には、市民の半数が市を逃れ、残る者のうち8万人以上が死亡している。当時人口25万のロンドンの混乱した様子は、ダニエル・デフォアの「疫病流行記」(現代思潮社)に詳しく報告されている。

この様な社会状況の中で、「死」が必然的に文学や造形美術の表現の対象となって行ったのである。15世紀には「往生術」(Ars Moriendi)と言う、木版画の

さし絵入りの本が、印刷機の発明と重なって、ヨーロッパ各地に普及していった。これは「死に方」を扱ったもので、「人間は如何に死ぬべきか」すなわち、「如何に生きるべきか」を教えるものであった。また、ハンス・ホルバインが製作した「死の舞踏」と呼ばれる木版画がよく知られている。これは41の画面から成り、「死」が人生のあらゆる場面に立ち会い、「生者」がその変身である「死者」によって死の彼方に誘われる内容が描かれているものである。この「死の舞踏」の起源は、修道会の「死」を主題とする説教と、それに関連する宗教劇にあると言われているが、ペストの流行と相俟って、「死」をテーマにした、この「死の舞踏」(Danse Macabre)の芸術が各地に流行していった。

後年、人々は、死体や骸骨が墓から抜け出し、笛を吹き、グロテスクな踊りを踊るといふのを真似て、実際に踊ったと言われている。

木・銅版画のほか、聖堂や墓地の壁画や墓像彫刻にも「死の芸術」が数多く残されている。墓像彫刻としては、インノケンティウス8世の墓が有名であるが、生前の姿と対比して、乾からび、ミイラ化した死体を表現するのが流行していった。「生と死の思想」舘田豊之著(朝日新聞社)という本にこの事が詳しく述べられている。

16世紀には、一般の家々の飾りにまで、骸骨の絵画や彫刻が現われ、「しゃれこうべ」のペンダントが広く愛用されるまでになって行った。この様に流行した理由として、世間一般の異常とも思える「死」の嗜好と共に、当時の宗教的な瞑想の伝統の影響を考慮しなければならぬ。修道院などでは、骸骨の実物を絶えず手元に置き、「死」を瞑想することが盛んに行われていたのである。そして彼らの合言葉は、「Memento Mori」であった。その意味は「死を思い起こせ」であり、言い換えれば、「人間は死すべき運命にある」ということを絶えず自分の心に刻んでおけという教訓である。

以上、幾冊を本を挙げ、当時の人々が「死」をどのように受け止め、また芸術にまで高めていったかの一旦を紹介して来たが、もし興味のある本があれば、一読されるようお勧めします。日頃、雑事に追われそんな事を考えることがめったにない、忙しい現代人にとってこそ、この「Memento Mori」という言葉は意味があるのかも知れません。

# 読書と私—読書ぎらい

工業化学科 青柳克弘

文章の理解力とか漢字の読み書きの力が弱い場合の原因の一つに読書ぎらいがあげられているが、それには、テレビやマンガ本の普及がかなり大きな影響を及ぼしていると思われる。

私の成長期におけるテレビの普及率は大変なもので、物心ついたころには、大抵の家にテレビがあった。「テレビっ子」という造語があるが、私の場合、さしずめ元祖テレビっ子とでも言おうか、とにかくよくテレビを見る子供だった。「夏目漱石」よりは「巨人の星」だった。

小学校の何年生のころだったろうか、友人に誘われて読書クラブに入ったことがある。定期的に図書室に集まって読書会を開くわけだが、好きな女の子に会えるという他の目的の方が優先してしまい、読書ぎらいから抜け出すきっかけにはならなかった。それが、中学・高専と尾を引いてしまい、高専の入試の時の、「今まで読んだ本の中で特に印象に残った本は何か」という質問にも、その場を繕った答えしかできなかった。さぞかし、先生方を失望させたであろう。小学校・中学校・高専の低学年と多感な時期に、本を殆んど読まず、深い感動を心に残すことができなかつたことを、今さらながら後悔している。

ようやく読書に興味を持ち初め、本を買うようになったのは、高専の三年生のころだったろうか。私は、四年生まで寮にいたが、寮の友人の影響が大きかったように思う。ある友人は、本を読むために高専に入学したと言った。高校・大学と進んだ場合、高校時代は受験勉強に追い回されて、読みごたえのある名作が読めない。ところが、高専は、その心配もなく、十分に本を読む時間をつくることのできるというのである。社会に出ても大卒の連中に負けない技術者にならなくては、と、気負い込んで、専門書は読んでも文学書を殆んど読まなかつた私にとっては、当時、大きなショックだった。

また、ある友人は、本を集めるのが好きだった。少しでも金が手に入ると殆んど本代に注ぎ込んだ。スチール製の本棚二つにぎっしりと本が並んでいたし、本でいっぱいダンボール箱がいくつもあった。全部読んだのかどうか聞いてみたことがあった。読むはずもないし、読めるはずもないという答えだった。彼が言うには、どんな本でも手元に置くことが大切で、本棚に飾っておけば、いつか読みたくなる時が来るかもしれない、その時にすぐに読むことのできるというのである。15才のころには理解できない内容でも20才にな

れば理解できるようになる本も数多くあるというのである。こういう友人達に恵まれた私は幸せであった。しかし、長いブランクを埋めるのはなかなか大変で、読書に親しむというところまではいかなかったように思う。視野の狭い人間になってしまうのではないか、専門バカにはなりたくない、という気持ちは常々あったのだが。

こんな私に一つの転期が訪れた。それは、大学に編入学後の国語の教授との出会いである。その先生は、とにかく半強制的に本を読ませるのである。それも、内容のある名作でなければならぬ。そうしないと単位が貰えないのだから必死だった。しかし、ひょんなところにきっかけというものは転がっているもので、それ以来、何の抵抗もなく本を読むことができたようになった。大げさに言えば、新しい世界が広がったような気持ちになるものである。こうなるのが遅すぎたような気もするが。

大学時代に読んだ本で代表的なものは、「チボ一家の人々」これは、「戦争と平和」に比べれば、登場人物も少ないし、読みやすいように思う。次に、スタインベックの「怒りのぶどう」カルフォルニアにおける移住労働者たちの苦闘を描いたもので、これは、先ごろ亡くなったヘンリー・フォンダ主演の映画にもなっており、ご存じの方も多と思う。他に、臼井吉見の「安曇野」、伊藤整の「氾濫」など数えあげれば切りが無い。それから、私は、歴史娯楽小説が好きで、特に司馬遼太郎の書いたものは大好きである。「竜馬がゆく」「城塞」などは非常におもしろかった。大学で研究の合間をみては読んでいた。最近、長編歴史小説に挑戦している。全26巻からなる山岡荘八の「徳川家康」である。読み始めてから約二カ月で15巻を読み終えた。現在は、これを完全に読み終えた後、今度は何を読むか考えているところである。あれだけ読書ぎらいだった私が、次に何を読むか考えるだけで楽しくなるというのだから、人間、変われば変わるものである。

最近、特に思うのだが、食わず嫌いだったものを、我慢して食べてみたら意外に美味しかった、ということがあるのと同じで、読書の場合も、内容のある（できるだけ長く読みごたえのある）名作とよばれる本を一度、我慢して読んでみる必要があると思う。どこに読書好きになるきっかけが転がっているのか、わからないものである。

# 「私の読書」

副委員長 3C 高橋和浩

私は「読書」を好まない少数の人々の1人です。しかし本を「見ることは好きです。「読書」と名のつくものは年に多くて2回、せいぜい1回がマイペースです。だから本に接する機会が少ないかというところでもありません。図書委員をやっている以上どうしても本に接する機会が多くなってきます。だから私の「読書」環境は人並以上に良いはずですが、「読書」の好きな人には分らないと思いますが、「読書」と聞くとも私のような「読書」嫌い「少年A」は気が重くなり本にさわる気さえなくなってしまいます。特に現国の読書感想文と言われた日はよけい「読書」が嫌いになります。

私は図書委員ということから様々な本に接する機会があるわけですが、それらの本をただ見過ごすわけにはありません。「こんな本もあるのか!」「相当ひまな著者がいるもんだ」と思ってみたり「なかなかかかしこい著者もいるんだ」とたまには感心してみたりします。そのうちにおもしろそうだと思う本を見つけると、まずチラチラと読んで、「これはおもしろい」となればさっそく読み始めるわけです。私の「読書」時間はむしろ授業中が多く、休み時間にはめったに読みません。だいたい休み時間は休むための時間だと思っていますから、寝て過ごします。そして睡くなる授業は寝

ないで「読書」を行います。他の学生のように休み時間に動き回って授業中寝るなどという先生に失礼なことをしません。ただし私が「読書」をしていないときは別です。「読書」の嫌いな私ですけれど読んでいるときにまで「読書」が嫌いだという意識はないみたいです。根は「読書」が好きなのかもしれません。

また、他人や先生からすすめて読んだ本は今まで2冊しかありません。たいていは途中で投げ出してしまいました。そんな本に限ってあまり印象が残らず、自分でケチをつけたりホメたりしてやっと読む気になった本はさすがに印象が強く残ります。よく若いうちには「読書」をたくさんしなさいという人がいますが、いくら数を読んでみても心に残らないようなら「読書」の価値が半減します。さらに心に残ってもその蓄積された知識と教養と呼ばれるものが実際に行動になって現われなければ「読書」の価値は「ゼロ」に等しいと私は思います。私の「読書」の理想は

「読書」 = 知識 + 行動力

です。みなさんも自分の手で自分に本当に必要だと思う本を選んで読んでみてはどうでしょうか。量より質の「読書」を行いましょう。

## 私達の読書会の活動、その後

4土 神谷光昭

私は、昨年この紙上を借りて、私達の読書会について、書かせていただきましたが、今度、その後の活動状況を紹介して欲しいという依頼を受け、ここにペンを執った次第です。

現在のメンバーは4年生以下12名で、他のクラブに入っている者がいるために、その活動に支障を来さないようにということで、月に約1回の割合で集まりを持っています。顧問は英語科の西山先生にお願いしています。

次にどのような内容で行っているかということですが、あらかじめ、全員が読む本を1冊決め、各人がそ

れを読んで、その感想などを交換しあうという形式で行っています。また各人が最近読んだ本の中から良書を紹介し合って、各人が本を選ぶ上で参考にしてもらうようにしています。

さて、昨年以來取り上げた本の中から、いくつかその内容についてここに記してみたいと思います。

### ① スペイン断章(堀田善衛著一岩波新書一)

この本は、作者がスペインの各地を訪れた際書き記したエッセイで、この国が歩んできた歴史とその遺物についての作者の深い思索が書かれたものです。スペインという国は盛衰の激しい国で、中世の初めには、

イスラム教徒の侵入を受け、それまで安住していたスペイン人達は、スペイン北部の大西洋岸の地域に追いやられます。しかし15世紀、イサベル女王とフェルナンド王のもとで、国土回復運動（レコンキスタ）と呼ばれる運動が起こり、イスラム教徒の手からその国土を奪い返します。そして海外進出の時代。スペインには新大陸からの金銀が続々と流入し、文字通り隆盛を極めます。しかし度重なる外征は、その金銀を国内に蓄積することなく、戦費として泡のように消えてしまい、衰退の一途をたどることになります。そして、今世紀に入ってのスペイン内乱。この戦いでヒトラーとムッソリーニの後押しするフランコ将軍が勝利を得て、その独裁は、つい10年ほど前まで続きました。その悲劇を描いたピカソの大作「ゲルニカ」が、アメリカからスペインに里帰りしたというニュースは、まだ記憶の新しいところです。

このようにスペインという国は、さまざまな盛衰を繰り返して来た国ですが、作者は各地の遺物を訪れ、その遺物が証言する歴史上の出来事について思いを寄せ、歴史とは何かということを我々読者に語りかけてくれます。なお、この本をとり上げた時には、校長先生においでいただき、専門の立場からいろいろと解説を受け、大変有意義な会となりました。

## ② 一太郎、捨次郎への手紙

（福沢諭吉作一福沢諭吉全集より一）

これは、国語科の池田先生に紹介していただき、先生にも参加していただいて取り上げたものです。内容は、明治初期、米留学した2人の息子へ宛てた福沢諭吉の人生訓とも言える手紙で、実学を重んじる福沢の信念と、厳しさの中に子供のことを心配する優しさがにじみ出た味のある手紙でした。やや昔の手紙であるためか、読みづらい面もありましたが、現代ではなかなか見ることのできない、心のこもった手紙の見本のようなものだったと思います。

この他にもいろいろな本をとり上げ、国語科の中村先生・倫理社会科の芋川先生などにおいで願ったりしました。また、いろいろな分野を取り上げてみようということで、SFものなどにも手を広げています。

だいたい以上述べてきたようなことで活動していますが、興味を持たれた方は、私か、他のサークル員のところに来ていただければ、いろいろとお話し致します。また最後になりましたが、今まで御協力していただいた諸先生方に厚く御礼申し上げ、このペンを置くことにします。

# 「日本人の考え方」を考える

—— 倫理学の課題論文から ——

（おことり） 編集・印刷のつごう上、元の長さを無理をして縮めた。趣旨の通らない処は編集者の責に帰する。特に筆者の寛怒を乞う。

## 甘えの構造（土居 健郎） 弘文堂

4E 穴 戸 博

作者が、この本の中で述べている、甘えとの定義はかなり広いものです。その中には、愛情とか相手との信頼などもその中にひっくるんでいます。極言すれば相手、つまり他者の関わりで少しでも相手に期待をいなく感情を持たず、それを甘えと決めつけてしまう。しかし、人間の間では、頼り・頼る関係が大切であり、それを甘えという言葉で置き換えてしまっている。それに対する作者への反発が第1に出て来た感想でした。

しかし、日本人の社会が甘えの上に成り立っているというのには同感です。日本人は、その出が農耕民族であったため自己を確立し、独立独歩で進むことは難かしいことでした。甘えの中から脱却するどころか、集団の中に埋没して仲間たちと甘えあっていかなければ、生きてゆけません。 (略)

日本人社会が外国人にとって閉鎖的なもの、そこにあるのかもしれませんが、外国人は、甘えのルールをマスターしていないがために、日本人はどう扱ったら良いのかわからないので、煙たがります。また同じ日本人の間でも、他人をグループの中に精神的には、なかなか受け入れられないのも、どの程度甘やかす甘えてよいかかわからないためだと思えます。そのため、最

初はよそよそしく、互いに搜りあってゆき、どの程度甘えられるか（この場合の甘えは、信頼に近いものですか）を知ってから、その基準に従って行動するものと思います。こうした手順をふまないでいきなり内側に入りこんでくるものは、たいていの場合反発され、厚かましい奴とされるか、少ない割合ですが気がおけないと優遇されるかの両極端です。

西欧社会には、甘えという言葉がないそうです。（略）

西欧では、甘えの概念が存在しないわけではないのですが、それに変わるものとして契約が幅を利かせたのだと思います。

「甘えの病理」の中で表わされているものは、現代人の中には多少の差はあれ、心の中に巣をくっているように思えます。現代の人間の間に強くある孤独感や不信任感、その裏返しである自由の主張。これらは、表面だけの個人主義の導入により、甘えの相互交換がうまくいかなかったことにより生れたのではないのでしょうか。（略）

日本人は、原始共産制社会の中に個人主義を持ち込んだため、木に竹を継いだみたいになり、社会の中に歪みが蓄積しつつあります。その個人主義の源、西欧でも社会がテロ・スラム化などの治安の乱れによりどうしようもなく不安定になりつつあります。これらのことから、人間の間には、適度な甘えが必要だと思われれます。この甘えとは、広意義の甘えで愛情や信頼、そして更生のための罰すら含まなければなりません。人間には、甘えと存在の2つが必要なのです。これらが共存し得る社会こそ、理想ではないのでしょうか。

## 日本の思想（丸山 真男）

岩波新書

### 4C 熊田 実

日本の「思想」は、私たちの現在に直接に接する日本の思想史的な構造をできるだけ全体的にとらえて、現に私たちの当面しているいろいろな問題の「伝統」的な配置関係を示そうとした。

日本では、儒学とか仏教史だとかいう研究の伝統はあるが時代の知性的構造や世界観の発展、あるいは史的関連をさぐるような研究はまずしく、少なくとも伝統化していない。日本思想史の包括的な研究が日本史また日本文化史に比べて著しく貧弱であるという。まさにそのことに日本の「思想」が歴史的に占めてきた地位とあり方が象徴されているように思われる。各時

代にわたって個別的には深い哲学的思索もあるし、また往々皮相に理解されているほど独創的な思想家がいなくてもない。けれども時代を限定したり特定の学派や宗教の系列だけをとりだすならば格別、日本史を通じて思想の全体構造としての発展をとらえようとすると誰でも容易に手がつかないのは（略）あらゆる時代の観念や思想に否応なく相互関連性を与え、すべての思想的立場がそれとの関係で自己を歴史的に位置づけるような思想的伝統が、わが国に形成されなかったということだと思う。（略）

しばしば儒学が仏教や、それらと「習合」して発達した神道やあるいは江戸時代の国学などが伝統思想と呼ばれて、明治以後におびただしく流入したヨーロッパ思想と対比される。日本人の内面生活における思想の入り込み方、その相互関係ということでは、根底的・歴史的連続性があるとしても、維新を境として国民的精神状況においても、個人の思想行動をとってみても、その前後景観が著しく異って見えるのは、開国という決定的な事件がそこに介入しているからである。というのは（略）開国という意味には自己を外、つまり国際社会に開くと同時に国際社会に対して自己を国＝統一国家としてしまう両面性が内包されている。その両面の課題に直面したのが、アジアの「後進」地域に共通する運命であった。そしてこの運命に圧倒されずに自主的にきりひらいたのは19世紀においては日本だけであったという。しかしそれだけに思想的伝統の基盤を欠いていたという事情から来る問題性がいまや出現せざるをえなかったのであると思う。

伝統思想は（略）私たちの生活感情や意識の奥底に深く潜入とは実は同じことの両面にすぎない。一定の時間的順序で入ってきたいろいろな思想が、ただ精神の内面における空間的配置をかえるだけで、いわば無時間的に併存する傾向をもつことによって、それらは歴史的な構造を失ってしまうのではないだろうか。

あらゆる哲学・宗教・学問を精神的経歴の中に「平和共存」させる思想的「寛容」の伝統にとって唯一の異質的なものは、まさにそうした精神的雑居性の原理的否認を要請し、世界経験の理論的及び価値的な整序を内面的に強制する思想であった。（略）キリスト教とマルクス主義は究極的には正反対の立場に立つにもかかわらず、日本の知的風土においては、ある共通した精神的役割をになう運命をもったのである。したがって両者ともひとしく、もし前述のような要請をこの風土と妥協させるならば、すくなくとも精神革命の意味を喪失し、逆にそれを執拗にせまるならば、まさに前述のような雑居的寛容の「伝統」のゆえのはげしい

不寛容にとりかこまれるというジレンマを免れないのである。(略)

思想が現実との自由な往復交通をする条件は、戦前には著しく阻まれていたことを思えば、今にして私たちははじめて本当の思想混迷を迎えたわけである。そこから何が出てくるかわからない。ただ確実に言えるのは、もはやこの地点から引きかえすことはできないし、また引きかえす必要もないということである。

## 夢と昔話の深層心理(河合 隼雄)

小学館選書

### 4土 湯 田 博 文

この本は著者の河合さんが夢と昔話について、その構造とそれらのもつ心理的意味を分析し、荒唐無稽なものとして無視されがちな夢や昔話の中にこそ、価値あるものが隠されているということを主張しているものである。河合さんはイメージの世界である夢を無意識的な心のはたらきとして捕え、それが昔話の深層に深く結びつくことを説明している。

夢を考えるのにまず意識ということにふれていて、人間は意識することができるだけでなく意識的な判断力に頼って生きている。しかしその意識の統合性が弱まっている、つまり人間の眠っている状態においては自分では意識していない無意識のはたらきが強くなり、このようなときに生じるのが夢であるといっている。そしてその無意識的な働きが時に意識的な面にも作用を及ぼすことがあり、ここに意識と無意識の相補性ということがでてくるが、それは後で述べるとして、次に夢とは実際にどんなものかについて考えたい。(略)

ところで夢のパターンについてであるが、これには河合さんがいうように過去と未来という形式があると思う。しかし現在はない。夢で現在を見ることはできないのである。それは夢という現象が無意識の世界でそれに対して現在が意識の世界であるからである。つまり現在とは、人間が明確に意識するものであり言語化できるもので、だからイメージの世界には含まれない。過去と未来の夢のパターンは、河合さんは過去を説明する夢、未来を予兆する夢として説明している。そしてこれらは共通して願望充足の夢の多いということが、自分たちのかつて見た夢を思い出しても言えてくと思う。(略)

前にも述べたように、意識と無意識の間にはある形で相補性というのが成り立っている。これは夢を解釈す

るうえで非常に大切なことらしく夢を見る原理でもあるらしい。河合さんはこのことを自我の再統合としてまとめている。それには人間というのは、自分自身意識しうることの総体がある程度のもたまりをもっていて、これを自我というのであるが、毎日の生活でこの自我は外界からいろんな条件・衝撃を受ける、そこで統合しがたい外的経験をなんとか自我に統合しようとし、そのなかで夢という現象が起こってくる、とある。そして、この再統合にはなにも外的なつながりだけでなく、内的なつながりもあって、その再統合のプロセスはある程度無意識的に行われ、そのプロセスというものを夢のなかで見るとはどうかと考えているのである。経験の再調整というか、つまり人間の無意識のほうのはたらきには意識の状態を補償するはたらきがあり、これこそ夢を見る原理としている。しかしこのことは、どちらかという心全体の回復としたほうが説明がつきやすいと思う。人間の意識可能なことはひとつの体系をつくっていて、その意識体系は統合性を維持しようとして何らかの意味で一面化されることがある。(略)

いったい夢が、昔話とどのように関連しあっているのだろうか。(略)すぐに思いつくのはどちらもまずこの世ならぬ体験をすること、そしてそれらを構成する内容もこわい夢とこわい昔話などというように似ていることである。こうして考えてみると、夢と同じように人間の心の内的な構造が昔話のなかにも反映しているのではということが思われてくる。

まず、日本の昔話の特徴であるが(略)鬼とか竜宮とか非常識なことをまったく平気でやぶってしまって、べつに統合も何もなく、そしてめでたく終わりになる。しかもその終わりというのは、いわば元どおりであってべつに宝物があったわけでもないし、すごい英雄ができたわけでもない。そういういわば自然の状態という元のところへまたかえったのだけれども、前とは何か一味ちがったものになっているのじゃないかという完結の仕方、これが非常に日本的であるという。それともうひとつ、日本の昔話には何でもかんでも日常的な普通の人間のレベルにそろえてしまう水準化のはたらきがある。金本郎が熊とすもうをとったり、浦島太郎がおと姫様とどんちゃん騒ぎするというふうにある。(略)

実は、ここまで読んできて夢と昔話は似たような心のはたらきかけからくることがうすうすわかってきた。夢も昔話も人間の心の深層と結びついているように思われる。河合さんの説明によれば、男性の無意識の深い層には常に女性像が存在し、これを元型とする。そこに存

在する元型は、時に外的事物に投影され、人間は「この世ならぬ」体験をする。そのような元型的体験を誰かが語る時、それは人々の心の深みにはたらきかけるので、長く記憶にとどまり、他の人々に語りつがれてそれが昔話になるということである。しかし自分には、これらの意味が正確に把握できなかった。なんていうか昔話には細かい理屈ぬきのものがあると思う。昔話とは、人間の心の奥を開くことによって、自我が全体のなかにうまく位置づけられ、故郷に帰ったような体験をする。そういうものなのだろう。発達した文明時代に生れ育った我々であるが、近代的な自我がややもすると人間の全体性からきり離されたものとなりがちである。そういうときに昔話は、そのきり離され

たものを取りもどし、全体性を回復しようとしてくれる。だから昔話に関心を持ち、語ったり聞いたりする若者たちが増えてきているのではないかと思う。(略)

これまで本を読んできて、まったく考えもしなかった無意識の世界を知り、これが人間の心理に結びつく極めて重要なことであることを知った。そしてその心理的現象として夢を見、昔話もでてくる。実に面白いと思う。またこれらに日本的・西洋的があるといったが、それを分析して比べることにより、日本と西洋の思想の特色をみつけることも可能であろう。日本人は西洋人からみると主体性がないとか無責任であるとか、そういう面白い一面がみられるかもしれない。

## 「読みごたえのあ」った本

### —— 2年生夏休みの読書 ——



本校図書館では、今年度の目標の一つに、「読みごたえのある本の読書を勧める」を掲げた。

その試みとして、去る夏休中に、国語科の課題の形で、2年生に各自一種類を選んで読み通し、その読後感を綴らせた。

「読みごたえ」とは、一応の目安として、各種文庫本で3冊以上の続き物であることとした。(昨年度に、岩波文庫解説目録を全員に配っておいた。)

読まれた本とその度数(人数)は下表の通り。

#### I 読書分布—世界文学

##### 1. イギリス

息子と恋人	ロレンス	4
ビーグル号航海記	ダーウィン	4
嵐が丘	ブロンテ	3

トムジョウズ・宝島・テス・アルプス登攀記・高慢と偏見・デビッドコパフィールド・大君の都  
——各1

##### 2. アメリカ

白鯨	メルビル	14
怒りのおどろ	スタインベック	13
若草物語	オルコット	2
大地	バルバック	2

エデンの東・武器よさらば・さよならコロンバス

・世界をゆるがした10日間——各1

##### 3. ドイツ

ゲーテ詩集	ゲーテ	3
魔の山	トマスマン	2

##### 4. フランス

レ・ミゼラブル	ユゴー	3
赤と黒	スタンダール	2
凱旋門	レマルク	2

ボバリ夫人・ペスト・エミール——各1

##### 5. ロシア・ソビエト

罪と罰	ドストエフスキ	10
アンナ・カレーニナ	トルストイ	5
死せる魂	ゴーゴリ	4
母	ゴリキー	2

悪霊・ガン病棟・白痴・復活・処女地——各1

##### 6. 南北ヨーロッパ

ドンキホーテ	セルバンテス	4
デカメロン	ボッカチオ	3
クオバディス	シェンキビチ	2

アンデルセン童話集——1

##### 7. その他

イーリアス(ホメロス)・西遊記(呉承恩)——各1

## II 読書分布一日本文学

細雪	谷崎	5	夜明け前	島崎	2
青春の門	五木	4	水点	三浦	2
暗夜行路	志賀	3	項羽と劉邦	司馬	2
朱鷺の墓	五木	3	悪魔の飽食	森村	2

吾輩は猫・ころろ・土・或る女・或る男・子供の四季・次郎物語・人間の壁・石中先生行状記・豊饒の海・橋のない川・二十才の原点・平将門・化石の森・落差・風の視線・人間のわな・宮本武蔵・まひる野・赤い雪・雄気堂々・天北原野・新史太閤記・関が原・城塞・源氏物語弐・新八犬伝・ゾンビハンター・クラッシュジョウ・子たちの女の物語・哀愁の町に……世界の偉人・世界の歩み  
——以上各1

古今東西の文学・歴史・社会関係の名著から無作為に選ばれた結果、特に著しく頻度数の高い三書一白鯨・罪と罰・怒りのぶどうについて、それぞれ取り上げた理由・動機を調べてみたところ

(冒険的で)おもしろそう5	友が勧めた	3	
有名	5	何となく	3
家にあった	4	内容を知っていた	2
テレビ映画で見た	4	本屋にあった	1

という回答が得られた。

読書心理の一端をうかがうに足りる。

(国語科)

❖ ❖ ❖ ❖

## 白 鯨

2土 草 野 雄 一

「白鯨」、これは現在、日本でいや世界の文壇でも、それ相応の評価を受けていて、それにも増して我々の間でも「まあ、名前ぐらいなら」というほど、深く浸透している、文学作品である。

この小説の主人公「エイハブ船長」は、幼い頃から必ず船乗りになると決心して以来、幾多の困難を乗り越え、またきびしい試練に耐え、そうして今自分の船を持ち堂々と指揮をとるようになった。その姿こそ、我々が見習うべき限りなく純粋で固い決意なのである。彼はそれこそ怒涛そのものの一生を過ごした。神出鬼没の怪物「モービィ=ディック」に片足を食いちぎられた。しかし、彼は再び海に出て戦いを挑むのである。それは、まさに地獄から死者が必死にはいでてくるような感じさえあった。再び「モービィ=ディック」に

戦いを挑んだ彼、エイハブ船長は、結局鯨の背中にしぼりつけられ、殺されてしまう。このエイハブ船長の人生は、「忍耐」そのものだったと思う。そして、それを痛感せずにいらなかった。

この冒険物語は、海の間人間に対する怒り・恐怖・悲しみなどを適切に訴え、しかも船長の生きざま、鯨との死闘などを見事なほどに描写した小説である。それは、これら優秀な作品に全ていえることであるが、「美」をもっていることである。その「美」とは、時にはファンタスティックな描写であり、時には愛であり、時には勇気であったりする。この作品では、執念だった。

この作品を読み終えて、一応満足した。そして感動し、エイハブ船長の生きざまを考え、あの白鯨「モービィ=ディック」の感情を思った。しかし、どこか物足りなかったのだ。それは、私自身の胸の底からわき上ってくるものがなかったということが……。

## 怒りのぶどう

2C 平 松 和 子

私は、この作品の作者(スタインベック)のファンであり、それで怒りのぶどうを選んだのである。今まで読んだスタインベックの作品「知られざる神に」、「天の牧場」、「トーティーヤ台地」により私が感じていたものは、彼はカルフォルニア、とくにサリーナスの谷を中心としてモンレー群各地の美しい自然や、そこに住んでいる素朴な農民たちから受けた影響を作品の中に多く反映させているという点である。そのためどの作品でも、ストーリーに自然の描写が微妙に深みをつけ、読者は作品の世界を思い浮かべそして引きこまれていく。幼きころ、名作と呼ばれる作品は、あまりにも自然描写が長すぎ、そのわりにストーリーが単純で、たいへん怠屈したのを覚えている。しかし現在は「スタインベック」の作品により自然描写の役割というものを認めることができるようになった。

「怒りのぶどう」という作品は、オクラホマの貧農ジョード一家が、多くの苦難(砂あらし・恐慌・大資本の進出……)により農民の命ともいえる土地を追われ、家財道具をボロの自動車に積みこみ、地上の楽園ともいえるカリフォルニアへと向って出発する。しかし長く苦しい旅の末たどりついたカリフォルニアも楽園とはほど遠く、また苛酷な運命が待ち受けていた。



という筋の話である。

その中で私が知ったことは、過去アメリカにも私たちが知らなかったような、現在の華やかさとはうらはらに、苦しい黒い時代があったということと、その中で人間は、耐えられないと思うような現実の悲惨に耐え、力強く生命の灯を燃やすものだということである。つまり人間はその時耐えられないと思うようなことでも時がたつといつの間にか、耐え、その生活になれてしまうような、強くそして悲しい動物なのではないか。

この作品がすばらしいものだと思うことはもう一つある。もしこの小説が特定の時期、特定の場所に起こった出来事をただ単に、センセーショナルに伝えているだけの作品であったり、悲惨な移住労働者の生活を改革することにのみ目的を向けている記録であったりすれば、その時期が過ぎ去り、訴えられた悲惨な生活が解消したりしたその瞬間から、みずからそれは文学であることをやめ忘れられてしまうだろう。しかし今なお、この作品に私が与えられた感動は、単に資本主義の悲情さや移住農民の生活の悲惨さだけでなく、もっと原始的そして基本的な生命の力強さ、神秘的な自然への回帰、集団としての人間の悲劇であった。これを私たちにあてはめれば、資本主義の悲情さはさらに発展し機械文明による支配の脅威に常に私たちは、さらされざるを得ない。こういうことから私たちが、共感をさそわずにはいられない作品であると思う。

## 罪 と 罰

2E 永山和郎

この本を読む前は僕は、幾分気がすまなかった。「罪と罰」、いかにも難しそうで、かっ気の遠くなりそうな印象があった。そしてその本をすっかり読み終えることのできた現在の自分自身を疑った。と同時に肩の荷を下ろしたような感じがした。

実際このラスコーニコフのように、金貸の一老婆とその妹リザヴェータを殺して、そこから危機一髪に逃れられてくるというのは、これは非常に困難なことだと思った。

また、僕の考えさせられたところは、本文中に何度か出たが、彼の殺しの動機である。彼は自尊心がとても強いというのがその根底にあった。肝腎の目的さえよければ、一つぐらいの罪悪は許さるべきだというわけなのである。彼は論文「犯罪遂行の全過程における

犯罪者の心理状態」を研究したのだが、犯罪者の彼にとってこれは自殺行為じゃないかと思った。この論文の中で結局問題にされた点は、つまり、選ばれた強者（歴史的人物など）は、凡人の為に設けられた法を踏み越える権利を有する、小悪は百の善行によってつぐなわれるというところであった。だから彼はナポレオンにひどくひきつけられてしまったとも言える。なぜなら、ナポレオンをはじめ多くの天才は、細瑾を顧みず、躊躇なく踏み越えていったという事実があったからである。

彼は、そのような理論を立てることができたが、どうしても躊躇なく踏み越えられない。してみると、彼は天才ではないと感じ、ひどく苦しんだ。自尊心もとわりわけ強かったがために。僕はこの時かわいそうな気もしたが、自惚れすぎているじゃないかという気持ちに圧倒されてしまった。彼に友人がほとんどいないのも当り前のように思った。それ以来、彼は無力と人事不省に数日間陥ってしまうのである。回復しても、孤独になりたがるのであった。母や妹が来てくれてもそうであったので、二人はもうとても心配になるが、彼の友人ラズーミヒンが、一生懸命になって助けてやるのである。友人のために、ここまで世話してくれる者はそうざらにいない、そう思った。彼はひどくおせっかいなのだろうか？

ラスコーニコフは、とうとうその事件に興味を持ち続けていたポルフィーリィに目をつけられ、毒舌をふるって彼をずいぶん苦しめる。そしてついに、彼は自殺を試みたができず、自供してしまうのである。彼は、愛人ソーニャの謙遜し、卑下しきった宗教の祈りに負けてしまったのだ。彼は8年の求刑を言い渡されソーニャといっしょにシベリヤへ行く。そして、また新しい人生が出發するのだ、自由と共に……………。

これらの出来事を、再度想像してみて、この本の題目の意味が少しぼんやりとしているけれど、なんとなくわかってきた気がした。

ラスコーニコフ、彼は闘った。「個人」を忘れた社会に、血みどろの戦いをしたのだ。その闘志は、孤独的でかわいそうだったが、立派だった。しかし、この本を読んで本当に疲れた。頭の中で、「超人・凡人・理論・実際・思索・本能……………」といろんな言葉が混ざってぐちゃぐちゃになってしまった。これは幾分深遠な哲学的思想が加わっているのが原因かもしれない。

ドストエーフスキイの本を読むにあたっては、心の準備、かつ頭の整理をきちんとしておくことが必要だと、つくづく感じられた。

# 息子と恋人

2E 横川一哉

「息子と恋人」、この作品は、僕には何か特異さがあるように思われた。この作品では、息子でもあり、恋人でもあるという、母と子の、一見、特殊ではあるが、実際には普遍的な性格を持った関係を扱っている。

母と子の関係は出産の事実に結びつき、性という言葉で片づけられている。母と子は、生まれた時から死に至るまで、切り離すことの出来ない密接な関係にある。私達は、日常、親子の絆と言っている。生まれた時以来の人生を母親と共に暮らす人、又、結婚して社会に出るまで暮らす人、それは人それぞれだろう。お互いに、切っても切れない仲にあるのだ。そして、ともすると恋愛とい、関係が生じる結果となる。お互い男と女である。異性が愛し合うことは、自然の原理であろう。恋愛と結婚は、必ずしも結びつかないだろう。家庭の事情で、当人同士は結婚したくても出来ないなどという例は、現実にくらでも存在している。

モレル夫人とポオルの関係は、あるいは一つの極端な場合かもしれない。しかし、彼等が立っている人間的な基盤は、みんながもっているものである。むろん、僕もその一人である。僕にも母親はいる。しかし、母親を恋人としてみたことは、まだ一度とてない。これが普通で、中には、そうでない場合もあるだろう。美しく、人間的に優れた母親をもったならば、あるいは恋の対象として考えられないこともない。

作品の中で、ポオルには、他に、クララやミリアムという美しい女性も登場していた。ポオルは、この二人の女性と愛をかわした。ミリアム、クララ、再びミリアムという順に。しかし、最初の二回は、結婚は出来ない愛であった。結婚というものは、お互いが愛し合っているからこそで、愛のない結婚なんて、ナンセンスだと思う。真に愛し合っているからこそ、結婚は出来る。ポオルには、彼女達の愛よりも、母親の愛の方が大きかったのだ。むろん、この本の中でも、彼は、「結婚までは考えられない」といっている。将来のことを考えるならば、母親の愛よりも、ミリアムかクララの愛を受け入れた方がよかったのではないかと思う。母親への愛は、又別に考えた方がよいのではないだろうか。肉親への愛は大切なことだと思う。ポオルにしても、母親と結婚などは、考えていないようだ。しかし、そのような愛し方では、ポオルを苦しめるだけではないだろうか。ポオルの考え方を改めた方が、現在よりも平和な生活が出来ると思う。

最終的に、母親が亡くなって、ミリアムと結婚することになったが、僕には納得がいかない。どうして早く結婚しないんだと思って読んでみると、じれったくなった。場面には、何度となく出くわしているのに。

ポオルは、ここまで母親を慕って来た。しかし、母親が亡くなって、これからのミリアムとの生活に、僕は、何らかの望みをこの二人にかけているような気がした。

又、この作品の中に出て来る人物の表現や感情が、豊かに感じられた。ある反面では、感情が豊かすぎて、恐ろしくも感じられた。

## ビーグル号航海記

2M 吉田幸一

種の起源で知っているダーウィンは、ぼくは初め、生物学者であるとしか知りませんでした。ダーウィンは進化論を唱えて、成功した学者であるが、その進化論の基礎となったのが、ぼくの読んだビーグル号航海記です。これは、ダーウィンが、軍艦ビーグル号に同乗し調査隊の一員として、南米・南太平洋諸島をめぐる時の記録でした。ぼくはこの本を選ぶ時、種の起源とこの本のどっちを選ぶか迷ったのですが、あえてこの本を選びました。動機は単純で、普通の人なら有名な種の起源の方を選ぶだろうと思い、それならばと航海記でもあるから、おもしろい方を選んでやれというのが動機でした。本を読んだ後で、ぼくはこの本を選んで大変考えさせられる問題に出会い、本当に良かったと思っています。

ダーウィンは航海中に欠かさず日記をつけていました。どの土地に行っても、動植物の生態・形容について詳しく記録していた事は、その内容を読んでもわかる通り、学者としての考えをもおり混ぜて記録してありました。ダーウィンは、それぞれの土地での人間との触れ合い、又動植物との触れ合い、さらに自然との触れ合いをも記録していました。ここで、私たちは、最近になって人間との触れ合いは複雑多様化していますが、動植物・自然との触れ合いなどはめっきり少なくなって来ているのではないかと思います。航海記の中で特に、いろいろな土地に訪れた時必ずと言って良いほど、鳥の事が出て来たと思います。ダーウィンは鳥と触れ合う時、鳥に対して危害を加えるといった事は一度もありません。かえって鳥と仲良くなるといっ

た方が強かったと思います。もし私たちが、そういった立場に立った時、どうやって対応したら良いか迷ってしまうのではないかと思います。私達は1960年代後半の人間ですから、工業化・都市化といった、自然とは正反対の方向に進んでいる社会の中で育って来ましたから、すぐにはなじむことはできないと思います。それから限定して鳥の事を掲げますが、私たちが住んでいる場所を見回すと、めったに鳥を見かける事が出来なくなって来ていると思います。小さい頃は空や木の枝を見ればいくつかの群をなしている鳥たちを見かけることが出来たのですが、いったいその鳥たちはどこへ姿を消して行ったのでしょうか。どんどんと山の奥へと行ったのかもしれませんが、鳥の住む範囲にも限度があると思う。また自然の環境が変わると、鳥の生態が変わるといった事も起ってくる。航海記では同じ種類の鳥でも、土地・環境条件が変わると習性も変わってくるという事が書かれてありました。このまえ新聞を読んでみたらビルの間に巣を作った鳥の事が書いてありました。昔ならば当然木の枝や、草むらなど、人目のない安全な場所に作ったのがこのように環境が変わると、習性も変わるといった事も起って来るわけです。これらは人間にとっても同じだと思えます。人間は心理的にも他の動物とは特にちがった動物ですから、自然の変化・環境の変化には大変左右されやすいと言えます。簡単で大ざっぱな事を言えば、時間がいそがしい都会では、人情がなく、ゆったりとした時を送る田舎では、とても人情が深いといったことなどです。

ビーグル号航海記が書かれたのは、1世紀も前の事です。まだ世界の各地で未開の土地もかなりあった頃、まとめた資料ですので、今と昔、自然と科学の進歩、原始的生活と合理的生活などを比べるには絶好のものだと言えます。ましてこれは動植物の生態資料でもあるわけですから、生物学のためにも役立つと言えます。

最後にこの本を読んで感じとれたことは、現代人には忘れられている、自然にいそむという事、又動植物にいそむという事です。あとつけ加えると船で航海する事、男のほくにはちょっとした冒険心といったものをわかせるものもありました。この本には、昔であったなら生物学の新しい資料ですが、現在ではそれにつけ加えて、自然に帰ることを思い出させてくれる自然の使いであるとも言えると思います。

## レ・ミゼラブル

2M 平野幸雄

僕は、この本を読み始めて数分の後、子供の頃読んだ記憶のある「ああ無情」と言う本を思い出しました。なおも読み進むと確かにこの本には今までかなり御世話になっているような気がしました。では、どこで御世話になったかと言いますと、それは小学校の時の「道徳」の時間だったと思います。その頃はまだ、その文章を読んでも何が何だか良く分からなかったのですが、何か素直な人間の美しさと言った物を感じ取ったような気がします。

今、高専2年生として読み終えた感想として、誠実な人間から受ける感動よりも、むしろ普通の人間の持っている心に恐ろしさを感じました。具体的に言うと、何げない噂話を鵝呑みにする心、他人よりも偉くなろうとする心、金持ちになろうとする心などの、本当に誰もが持っている心が、時には、恐ろしい方向へ人間の人生を変えてしまうことがあると言うことです。

この物語りの主人公、ジャン・バルジャンは、ある神様の生れ変わりのような司教ミリエル氏に会うまでは、普通の人間どころか、悪人でした。その悪人も神様には勝てず、正しい道へと進み始め、司教のような聖人へと変わって行くのですが、聖人とまで行かずとも誠実な人間になった彼には、僕から見るととても未知で理解出来ない、親が子を思う心のために、自分の生涯を彼の子として思って来たコゼットに捧げるのです。

この本を読んで、ジャン・バルジャンが最終的に成功して幸せな死を迎えて良かったなどと感想を抱く人はいないと思いますが、もしそう思う人がいれば、その人は本を読んでいないか、それともどうかしている人だと思います。

一方的にこのように極め付けるのは悪いことと思いますが、少なくとも僕は、この物語りを正直者の悲劇として終始読んで来て、どうしてもジャン・バルジャンは幸せな一生を送ったとは思われなかったからです。もし僕がジャン・バルジャンならば、「やることはまだ沢山残っている」と言って死んだと思います。

僕は、この本を読んで僕なりに、「人間とはいかに生きるべきか」と言う人生観について、ささやかながら触れることが出来たような気がします。

夏休みの宿題と言うわけで読んだのですが、このように、溜め息の出るようなストーリーと、読者に人生観について考えさせるような内容を持った本を読むと

とが出来て、本当に良かったと思います。

## アンナ・カレーニナ

2土 高 木 久

私は昔から題名だけに興味があったトルストイのアンナ・カレーニナを読んだ。オヴロンスキー夫妻のめめ事から始まるこの小説は、トルストイの傑作である『戦争と平和』と両翼をなすものだと聞いていたが、私はまさにその通りだと思う。

この作品を読んで感じたことは、登場人物の中に私が最も嫌いなタイプの人間がいたことである。その名はヴロンスキーだ。ヴロンスキーという男には頭にくる。キチイという社交界に入りたての娘を、リョーヴィンという農場経営者として取り合いになったとき、私の性格からいってリョーヴィンを応援した。しかしキチイは、ヴロンスキーの表面的な好青年ぶりにひかれて、ヴロンスキーを選んでしまった。ところが当のヴロンスキーは、駅に母親を迎えに行ったときに会ったオヴロンスキーの妹のアンナカレーニナに情が移り、しかも本人のいる前で情が移ったことをはっきりと示すような行為をした。その結果キチイは当然のことながら恋の病にかかってしまう。私は本を読んでいて、「なんて野郎だ、これが男のやることか」と叫ばずにはいられなかった。

一方、キチイに求婚して断われたリョーヴィンは、その場からすぐに立ち去るわけにもいかずに、キチイとヴロンスキーのいる前で別の客達と皮肉っぽい雑談を始めるが、そのときのリョーヴィンの気持ちは私にも痛い程良く分かる。もし私がこの立場に立たされたら、きっと発狂してしまったに違いないだろう。

さらにヴロンスキーが苦しめた人間はもっといる。アンナとアンナの夫であるカレーニンだ。カレーニンは性格的に冷淡な部分もあったが、アンナを愛していたことに変わりはないはずだと思う。それをヴロンスキーがアンナに近づき、夫婦生活を破壊してしまった。もっとも、アンナもヴロンスキーを愛していたのだから仕方がないと言ってしまうと、それまでかもしれない。しかし、カレーニン夫妻には、セリョージャーという愛すべき息子がいる。このセリョージャーまで不幸にすることは、私は絶対許されることではないと思う。

それに比べリョーヴィンという人物は私の最も尊敬

するタイプの人間だ。キチイに断われ、絶望の淵に立たされてもそれにめげず、その苦しみを忘れようと仕事に情熱を傾ける。私はこういう男が好きだ。もしこの世に神がいるのなら、こういう男にこそ幸福を与えるべきだと思う。

その願いが通じたのか、トルストイと私の意見が一致したのか、キチイとリョーヴィンはいつの間にかお互いを意識し合うようになり、愛し合い、皆に祝福され、結婚をした。私は心の底からこの2人におめでとうを言ってやりたい。

一方、社交界も、家庭も、愛しい息子も、自らの心の不安さえも投げうってヴロンスキーのもとへいったアンナ。ここまで読んで私は、アンナの気持ちも分かるが、何もヴロンスキーのもとへなど行かなくてもいいと思っていた。案の定、一年程で2人の関係は壊れてしまう。その結果アンナは悲惨な鉄道自殺をとげる。私は、あんなヴロンスキーのようなくだらぬ男のために、アンナが死ななければならぬのかと思うと、<sup>はらわた</sup>腸が煮えくりかえるような思いだった。

以上、アンナ・カレーニナの内容と感想をおおまかに述べたが、最後に、この作品全体について感じたこととして次のことを挙げたい。

この作品によって私達がこれから大人になったときに必要な、細かくてデリケートな心の動きを十分に味わうことができたということと、それによって、自分がこう言ったとき相手はどう答えるだろうか、あるいは相手がこう言ったとき自分ならどう答えるだろうか、という微妙な心理を知らず知らずのうちに飲み込んでしまったということである。流石文豪トルストイの作品だけはあると思った。

私はこの作品のおかげで、精神的に5年も10年も成長したような気がする。だからトルストイの作品は全部読んでみたくなった。これから先、何が起るかわからないが、挫折しそうなときには、トルストイの作品を読んで心に栄養をつけたいと思う。



# 死せる魂

2E 遠藤英典

県庁所在地のNNという市のある旅館の門へ…という書き出しで書かれている。この市へやって来た六等官パーヴェール・イワーノヴィッチ・チチコフ。この男は妙に変なところがあると思う。その前にこの題目についてだが、これの原語、ミヨールヴィエ・ドウシンのドウシには靈魂・農奴という意味がある。この表題はこの二つの意味を含めて用いられている。つまり、主人公チチコフが地主から買い求めて歩く<死んだ農奴>を示すと同時に、作者の描いた地主・役人ら<魂の死んでしまっている人間たち>を示している。この表題および小説を書いた作者ゴーゴリはすばらしい人ではないか。この<死せる>=農奴・魂という二つのことについて読書に訴えている。私にはあまり理解できなかったが、何か奇異な感じを抱いた。

次にこの主人公チチコフについてだが、チチコフの父は彼に、目上の人に気に入るようにしろ。友達づきあいなんぞすることはないぞ、どうせろくなことは教えてくれやしない。どうしてもつきあわなければならないときは、なるべく金持ちの子供とつきあえ。他人におごってやったり、御馳走することはない、それより人からおごってもらうようにうまく立ちまわれ。銭がこの世で一番頼りになる。この世では銭さえあれば、どんなこともできるし、何でもやり遂げることができる。と教えている。

しかしこの考えは明らかにまちがっていると思う。目上の人に気に入るようにしろと教えている。でも、はたしてそんなことを教えていいのだろうか。たとえ目上の人に叱られようとも自分の意見を言えというのが本当なのではないか。それに、金持ちの子供とつきあうことがいいことだろうか。そんな考えを持っていると、最後には、他人からおごってもらうこともできず、真の友達もできなくなってしまうだろう。最後に銭がこの世で一番たよりになるだろうか。何でもできるのだろうか。人の心は銭で買えるのだろうか。人の愛は銭で買えるのだろうか。彼の父には、許せないところがある。そんな風にした社会にも恐りの気持ちを隠すことができなかった。

「もはや漠然たるものとなっており、我々は辛うじて…」というところで原稿は中断されている。以下の原稿は、作者が死の直前、暖炉に投入し焼却したものと考えられる。とあるが、なぜゴーゴリはこのようなことをしたのだろうか。これ以上自国の恥をさらしたく

なかったのだろうか。とにかく私がこんな長編小説に熱中したのは初めてだと思う。だからこの小説を何かなんでも最後まで読みたかったのだが、それができないことは、ものすごく残念だった。でも、まだあきらめきれない気持ちだ。

最後にこの小説は、野望を抱いて死んだ農奴を買い集める主人公と彼をめぐる人々を写實的に描き、帝政ロシアの腐敗した社会を暴く作品なのだが、なにか教えられるべきこと、考えさせられるべきことが、数多くあったのではないか。これからは、このような小説を読んでいきたいと思う。

## ドン・キホーテ

2M 緑川祐二

今回の課題は、「3冊以上の本を読むこと」だった。僕は、今まで3冊続きの長い本を読んだ事がなかったので、読むだけでひと苦労だった。

今、この本「ドン・キホーテ」を読み終ったが、以前に想像していたのとは、だいぶ違っていた。何年前かに、NHKテレビの「みんなの歌」でドン・キホーテが放送されたのを、今でも覚えている。その頃、この歌も好きだったし、画面では、一人の騎士が何度も何度も、大きな風車に向かって行く姿だった。こんな事があったから、夏休みにドン・キホーテを読もうと思いついたのだった。

読んでみると、ドン・キホーテが何冊もの冒険の本を読みすぎて、自分は正義の遍歴の騎士と思い込んでしまい、徒士サンチョは、ドン・キホーテを信じて旅をするのだった。空想や夢を求めるドン・キホーテと現実的に物事を考えるサンチョとの冒険での旅の会話が、真剣にとんちんかんな事を言い合う二人がおもしろかった。

そして、いろいろな冒険をドン・キホーテ自身、作り出すのだが、中でも印象が一番残ったのは、やはり風車を巨人と思い込んで戦う姿だった。サンチョがいくら止めても、彼は何度となく向って行き、風車にはね返されるのだった。こんな所にロマンを感じて感動した気がする。

最初の冒険は、すぐに帰って来るのだが、二度目は、サンチョを連れて八カ月の冒険に出た。ドン・キホーテは、自分では正義のためと思っているが、彼がかかわるとそれよりもっと悪い結果が生まれた。そして、

みんなからは狂人と思われ、笑い者にされた。それから、村の人々は、無理に彼を捕えて、村に連れて来たが、結局、最後は、三度目の冒険に出てしまう所で、この本は終わっていた。

今度の冒険で何が起こるか知りたくてたまらない。きっと今までより、もっと笑わせてくれるような冒険をすることだろ。

## 暗 夜 行 路

2M 佐々木 陽

私は今までに、日本の文学作品というものを全くと言っていいほど読んだことがなかった。夏休みはよい機会だと思い「暗夜行路」を手にした。

私が思うに、主人公の時任謙作の人生は試練の連続だった。登喜子という芸者に一目ぼれしたがまもなく失望、次に愛子という娘に求婚したが、仲に立つ男の不誠意などで失敗した。こうした中で人間不信の念が起こるのも不思議ではなかったような気がする。

謙作が、自分の出生の秘密を兄から知らされたときの失望と落胆は想像もつかないぐらいに大きかったにちがいない。しかし謙作は、それを克服した。生涯秘密を知らないでいるよりは、そのときに知ってよかったと思う。

謙作の苦悩の種は、妻直子の不義に関するものではあったが、それだけではなかったような気がする。謙作は祖父と母との間にできた子だった。それらがクロスオーバーして謙作をより一層苦しめたであろう。この苦悩の中から旅に出るということを目指した。

謙作の人生の中で、お栄という女性は大切な役割をはたしていたと思う。お栄は謙作の祖父のめかけをしていた女だが、あるときは母親、あるときは親友、またあるときは恋人として謙作にとって重要な人だったに違いない。謙作が祖父にひきとられて以来、一緒に生活してきたので、お栄は謙作の感情教育には欠かすことのできない女性といえるだろう。

この作品の結末で、直子は「助かるにしろ、助からぬにしろ、自分はこの人を離れないでどこまでもこの人についていくのだ」という意味の決意を自分の心に言いかかせている。これが謙作との和解だと思ふ。

作者は人間の過失をできるだけ軽く考え、また、不幸を拘泥することを避けようと努めていて、人間の本性を見いだそうとしたと思う。

## 細 雪

2E 大 谷 浩 樹

この小説は、太平洋戦争が勃発したころに書かれ、「細雪」の内容も、だいたいその戦争に前後したものでした。しかがって、この時代の生活が、はたしてどのようなものであったかということは、だいたい想像出来ました。

この小説の主人公的人物が生活していた藤岡家は、旧家であり、大阪では少しは聞こえていたということなので、この時代にしては結構はなやかな生活をしていたようです。

4人の姉妹が出て来ます。鶴子・幸子・雪子・妙子。一口に言えば、旧家ということを一歩気にしている鶴子、めんどろ見のよい幸子、おっとりしていて、いかにもお嬢さん育ちという感じの雪子、やっかい者の妙子、などという性格であろうかと思ふ。それぞれに個性があって、仲のいい姉妹であることが想像されます。しかし、旧家で、結構名の知れた家であるということからか、少々他人行儀などところがあるようにも思われました。鶴子1人は本家に住んでいて、他の3人は、分家ということなので、分家の3人は、本家の姉に特に気を使っているようでした。現代の社会では、本家・分家などということは、ほんの一部にしか残っていないと思ふ。だから、今の兄弟や姉妹とは、どこか感じのちがった姉妹だったのでしょう。私には、3才年上の姉がいますが、やはり、鶴子や幸子などのような気の使い方はあまりしていないと思ふ。姉は弟である私に対して、理解をもって接してくれますし、私も姉に対して同様であります。そんな姉は、私にとってよい姉さんだと思ふています。

「細雪」の4人姉妹の中で、よい姉さんという感じがするのは幸子だと思ふ。妙子というやっかい者がもってくる数々の問題に対して、いつも親身になって考えてくれて、雪子の結婚問題についても、いろいろ気を使いながら心配してくれていました。それは、分家の3人の姉妹の中では、一番上の姉であるということも一つの理由になっているのでしょう。本家にいる姉、鶴子はいま一つ、幸子のようにはいかないようで、いつも問題を起こす妙子を、やっかい者として扱わず、家との縁を切れなどと言います。しかしそれも、旧家であるということや、そのための世間体などということを考えてためでもあったろうし、本家であり、一番上の姉である鶴子にとっては仕方ないことだったのでないかとも思われました。

私の性格としては、一番下の妙子が好きです。好きというよりは、どこか私と共通点があるように思うのです。最近私は、自分の家ではなんとなく自分がやっかい者になっているように思われてきました。しかし妙子は、恋人に死なれたり、赤ん坊にしまわたりして結局は、かわいそうな女だったんだなあと思いました。雪子は、何度も何度も見合いを重ね、最後にはいい結婚相手が見つかったので、それからは、幸せに暮らせたのだらうと思いました。鶴子も幸子も、今度はやっかい者がいなくなって、それぞれの家庭でのんびりと生活出来たのではないかと思います。

この「細雪」は、この4人の姉妹の美しい愛や、時には、いがみ合いなどを、鋭い表現力を持って表わし、私たち読者に何とも言い表わせない感動を与えてくれました。私は、改めて作者・谷崎潤一郎の偉大さを感じました。

## 青春の門（筑豊篇）

（五木 寛之）

### 2C 志賀正道

この小説は、伊吹信介という男の一生を描いたものだが、今回ぼくは、まず筑豊篇を読んでみた。

伊吹信介は、筑豊で生まれ、彼を生んだ母親は、彼を世の中に送り出して、その晩、死んでしまった。彼の父親は、重蔵という名で筑豊では名の知れた勇気のある男だった。重蔵は、信介が小さなときに、事故で鉱山にとじ込められている人々を自分の命を捨てて助けた。この重蔵の一生は、大変充実していて、思わずあっけにとられてしまうようなすごいものだった。まさにスーパーヒーローと呼ぶにふさわしい人だ。

こんなすごい人のたった1人の息子信介は、小さいころから2人目の母タエから毎日のように重蔵の話を聞かされた。普通だったらそんなに毎日同じ話を聞かされたら頭にくるのではないのだろうかとはぼくは思った。

信介は、成長するにつれてだんだんほかの子供たちより勇気のある男になってきた。やっぱり重蔵の血が流れているからだろう。例えば、だれもおそろしくてよりつきもしない針谷鉱の骨富士と呼ばれている山に、夜1人で登ったり、朝鮮人の村に1人で行って、朝鮮人の少年にさしの喧嘩を売ったりした。この朝鮮人の少年の兄は、重蔵に命を救ってもらった人の1人だったので、その後信介親子と親しくなるようになった。

ししばらくしてから、信介親子は重蔵の喧嘩友達だった塙竜五郎というやくざの組長に、世話になることになった。なぜかといえば、重蔵が死ぬ間ぎわに、最大の宿敵であった竜五郎に信介親子のことをたのんだからである。つくづく重蔵の偉大さには、感心させられた。

竜五郎と知り合ってから、信介は、竜五郎の乗っていた巨大なオートバイ、ハーレーダビッドソンに興味を抱いた。いつの時代でも少年たちは、オートバイのとりこになるのだなあと思った。

信介は、高校に入ってから梓という音楽の女教師を好きになった。彼女は、そのころの女としては、異常なほどハイカラな人だったのだが、信介は、彼女とお互いに悩みを相談する仲になった。一度は、塙組のあとつぎになろうとした信介だったが、この梓先生の勧めで大学を受験し合格した。彼の少年時代は、とてもとてもぼくなどには足もとにもおよばない充実したものだ。この少年時代を基盤としてどのような人間になっていくのかが見ものである。

## 朱鷺の墓

（五木 寛之）

### 2C 仲間崇行

私が何故この本を選んだかという、まず題名に引かれたからである。『朱鷺の墓』等という少し風変わりな、そしてどことなくさびしげな点に引かれたのである。

あらずしは、日露戦争が始まる直前から第一次世界大戦直前までの、染及という芸者の生き方をつづったものである。

その女、染及は、金沢のある町で一番とまでうたわれている若き芸者だった。しかし、ひよんな事から捕虜として金沢に来ていたロシア人のイワーノフと結婚することになる。それから染及の辛い半生が始まる。

この本を読んで一番痛烈に感じたのは、国家権力に対する庶民の非力。混乱時代の中での庶民の心の弱さ、強烈な欲望。そして女というものの強さだった。

染及がロシア人のイワーノフと結婚したのも、当時の時代が反映しているし、それに捕虜に見せるために国家が、金沢一と言われる染及に芸をやらせた。結局それは染及（庶民）の手ではどうしようもできないし、反抗することもできない。それがもとでイワーノフと結婚する。

次に、せっかく結婚した染及とイワーノフを、イワーノフが故国ロシアへ帰っている間に、前々から染及を狙っていた町の有力者がチンピラを使い、自分のものにし、あげくは売春宿に売りつけたのだった。

これこそ、混乱時代の中での庶民の強烈な欲望であるし、真暗闇の世の中での不安な心のはけ口をこういうような形でしか発散できない庶民の心の弱さといえるものだ。しかし、こういう境遇にあっても、人間（女）とは強く生きていくものだなあと感心してしまった。

売春宿に売られてしまった染及が自分だけの力で借金を返し、たった1人で、イワーノフがいると思われるロシアへ渡って、そこでも又、苦しく貧しい生活をしながらついに、イワーノフと再会する。

この所で染及（女）の生き方には本当に感心してしまった。1人の人間といっても、ただ弱だけじゃないということを知り、少しうれしく人間というものに望みをもった。

戦争というものの影響がこんなちっぽけな非力な女の人生をも変えてしまうのか、と思うと本当に恐ろしくなってしまった。

現在、世界各地で反戦運動が高まっているが、この本を読んでその運動に、心から共鳴したいと思った。

## 雄 気 堂 々

(城山 三郎)

### 2土 吉 沢 信 之

この作品は、幕末から明治初期の時代において、実業家の渋沢栄一の生き方を書いたものだ。彼は、埼玉県の一農民の子として生まれ、明治の元勳たちと肩をならべ、近代日本を築く指導者の1人となり、経済人として大成した偉大な人だ。

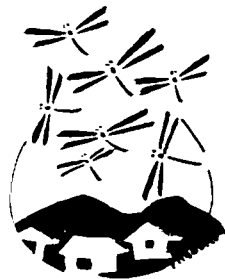
彼は、維新前後の2年近くを西欧文明にふれて過し、帰国後、合本組織による商業の振興を考えた。しかし何もかも新しく始めなければならない新政府は、財政に明るく合理主義的精神をもつ栄一を必要とし、彼は大蔵省に勤めることとなった。各方面の改革を討議する部署の設置や洋式の製糸工場建設などに才腕を発揮した。だが、新政府内での実力者の間には勢力の伸長をはかる対立が絶えず、それらが大蔵省への支出要求となって、財政の健全化をはかる彼の立場にはさまざまな圧力が加えられた。いろいろな問題も、彼の冷静な判断によってかたづけられた。

大久保利道との衝突やさまざまな問題で彼は官界を退き、かねてからの念願だった合本組織の夢を育てるべく、第一国立銀行の頭取として実業家への道を歩みはじめた。だが、そこでもまたいろんな問題にぶつかった。

横浜で外国商人が蚕卵紙を買いびかえして、日本側を困らせたり、第一国立銀行の大株主小野組の倒産、三井や岩崎の暗躍、新しい民主資本家の台頭などの経済界のさまざまな動きの中で、彼の活躍は続いた。蚕卵紙の問題では、持ち前の行動力と知恵で、日本の経済界を外国の手から救った。彼の合本主義に対する夢と情熱がいろいろな問題を解決するための大きな支えになったのだろう。三菱の個人経営による海運独占を切りくずすために、風帆船会社を設立したのも、合本組織の振興という彼の意識のあらわれであると思う。

この作品の最後で、彼の妻の千代がコレラで死んでしまう。その本葬において、銀行・製紙・セメント・紡績・鉱山・ガス・電灯・海運・鉄道・織物・牧畜・貿易・倉庫など、さまざまな分野の会社が金品を届けている。彼の望みの実業の発展により、いろいろな会社が名をつらね、さぞうれしかったことだろう。

この作品は、ひとつの人格形成の物語であると同時に、国家形成・時代形成の物語、あるいは組織形成の物語であるといえると思う。これは、僕の人生のさまざまな段階で、くり返し読むことで多くのことを教えてくれるように思う。





# 利用統計(夏休み)

## I. 帯出人員と冊数＝学年・学科別

学 年	1		2		3		4		5		計	
	人	冊	人	冊	人	冊	人	冊	人	冊	人	冊
機 械	4	8	40	70	3	6	9	14	15	25	71	123
電 気	8	13	40	64	10	18	10	17	28	77	96	189
化 学	4	8	37	68	12	16	10	19	10	18	73	129
土 木	4	6	37	66	4	7	2	3	9	17	56	99
計	20	35	154	268	29	47	31	53	62	137	296	540

## II. 学年・分類別冊数

分類	学年					計
	1	2	3	4	5	
総 記	7	1	5		2	15
哲 学	11	3	2	1	3	20
歴史・地理		13	1	3	1	18
社会科学	1	5	1		2	9
自然科学	10	55	5	21	31	122
工学技術	1	15	16	24	89	145
産 業			1			1
美術・体育		1	1			2
語 学			2		2	4
文 学	5	175	13	4	7	204
計	35	268	47	53	137	540

昨年の481冊に比して約60冊多い。5Eと4土が両極端。

2年生の文学関係の激増が目立つ。  
宿題のせいも大。

## III. 学科・学年分類別冊数

学年	科	分類 在籍人	総記	哲学	歴史	社会	自然	工・技	産業	芸・体	語学	文学	計	昨年
			0	1	2	3	4	5	6	7	8	9		
1	M	42	2	2			1	1				2	8	1
	E	41	4	6			1					2	13	
	C	42		2			5					1	8	
	土	41	1	1		1	3						6	
	計	166	7	11		1	10	1				5	35	
2	M	40			3	3	28	6				30	70	84
	E	42	1	1	4		10	6				42	64	
	C	41				1	15	2				50	68	
	土	40		2	6	1	2	1		1		53	66	
	計	163	1	3	13	5	55	15		1		175	268	
3	M	40	1				1					4	6	64
	E	40	3	2				7	1	1		4	18	
	C	37	1		1	1	3	4			2	4	16	
	土	39					1	5				1	7	
	計	156	5	2	1	1	5	16	1	1	2	13	47	
4	M	43		1	2		2	8				1	14	104
	E	41					4	11				2	17	
	C	36			1		15	2				1	19	
	土	37						3					3	
	計	157		1	3		21	24				4	53	
5	M	36					2	21				2	25	99
	E	37	2	2	1	2	17	47			1	5	77	
	C	33					9	8			1		18	
	土	41		1			3	13					17	
	計	147	2	3	1	2	31	89			2	7	137	
総 計	789人	15	20	18	9	122	145	1	2	4	204	540		

昨年比で4年生が激減。長い工場実習が関係あることは明らか。

## 寄贈図書紹介

このたび下記各位が、図書を寄贈して下さいました。厚くお礼申し上げます。ついでには末長く図書館に備付け活用させていただきます。

### 日本アイビーエム株式会社殿

朝永振一郎著作集

- |              |       |
|--------------|-------|
| 1 鳥獣戯画       | みすず書房 |
| 2 物理学と私      |       |
| 4 科学と人間      |       |
| 7 物理学とは何だろうか |       |
| 8 量子力学的世界像   |       |

### 鈴木将夫殿（長橋病院長）

鈴木将夫

幻想の森

鈴木将夫

### 福島高専同窓会殿

鈴木孝雄

青春の樹

鈴木孝雄

### 技報堂出版社殿

石川六郎編

新体系土木工学 別巻 海外建設プロジェクトと建設輸出 技報堂出版

### 和同会殿

色盲治療の最新情報'81 世界日報社  
Color Bilindness Cure Developed  
in Tokyo ジャパン・イエロー

### 日本内航海運組合総連合会殿

内航海運 日本内航海運組合総連合会

### 新栄堂書店殿

工学書協会 30年の歩み 工学書協会

### 旭硝子工業技術奨励会殿

旭硝子工業技術奨励会研究報告 Vol38・39  
1981 旭硝子工業技術奨励会

### 内閣総理大臣官房広報室殿

昭和57年 日本の白書 清文社

### 国際電信電話株式会社殿

昭和55年度 衛星通信年報 国際電信電話  
同 国際電信電話年報

### いわき市教育委員会殿

いわき市都市計画区域内埋蔵文化財包蔵地  
分布調査報告書（小名浜地区）

いわき市教育委員会

薄磯貝塚範囲確認調査

### 日本試験機工業会殿

日本における試験機のおゆみ

日本試験機工業会

### 建設省土木研究所企画部殿

耐風耐震構造専門部会第13回合同部会会議  
録 1981 建設省土木研究所企画部

### 東北建設協会殿

みちのく東北地方の直轄河川

東北建設協会

### 原田栄殿（前教官・現茨城大）

毎日新聞百年史 1872

毎日新聞社

### 福島県議会殿

福島県議会史 昭和編 第9巻

福島県議会

### 御所ダム工事事務所長殿

御所ダム工事誌

建設省東北地方建設局御所ダム工事事務所

### 日本国有鉄道盛岡工務局殿

東北新幹線（有壁・盛岡間）地質図

日本国有鉄道盛岡工務局

同（白河・桑折間）地質図

### 鳥羽商船高等専門学校殿

百年史

鳥羽商船高等専門学校

### 福島県教育委員会殿

福島県の文化財

福島県教育委員会

同 指導の手引き 1981

### 佐藤大介殿

佐藤大介

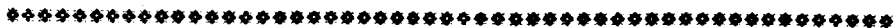
あひるへいけ作品集

佐藤大介

品川白煉瓦株式会社湯本工場殿

- 窯業協会誌 Vol 82~89
- セラミックス Vol 9~16
- 電気工学汎論・上・中
- 実用常識電気学
- 最新誘導電動機
- 物理学・上・下
- 物理学実験
- 蒸気機関及び蒸気タービン
- 電圧ガス工業技術

- 函数概論
- 原子物理学概論
- 触媒
- 中小企業経営論
- 科学のプロフィール
- 産業革命
- 機械工学一般
- 化学工学概論
- ガス工業・上
- スタッフとライン



新着図書目録

※印は図書館、他は各教育の研究室に所在するものを分類別受入順に記載

総記

- 朝日新聞縮刷版 昭和57年2月~6月号  
朝日新聞社※
- 福島民報縮刷版 昭和57年1月~5月号  
福島民報社※
- 福島県万能地図 同 ※
- 各駅停車全図歴史散歩・福島県  
河出書房新社※
- 三枝博喜著作集・別巻  
中央公論社※
- 斎藤伊知郎  
坂下門外の変 真修堂出版
- 人類の知的遺産  
11 韓非 講談社※
- 44 ベンサム 同 ※
- 45 ゲーテ 同 ※
- 52 トルストイ 同 ※
- 東洋文庫  
407 唐詩選国字解3 平凡社※
- 408 中国民衆叛乱史 同 ※
- 409 バンシリ 同 ※
- 410 大連河発展史 同 ※
- 411 南嶋探険1 同 ※
- 島原猛著作集  
2 仏像・羅漢 集英社※
- 3 美と宗教の発見 同 ※
- 5 仏教の思想1 同 ※
- 10 隠された十字架 同 ※
- 11 水底の歌 同 ※
- 12 さまよえる歌集 同 ※
- 16 湖の伝説 同 ※

哲学

- 仏教と民俗 角川書店※
- 内村龍三全集 19~24巻 1912~1919  
岩波書店

- 田村芳明  
殉教の如來像 日本放送出版協会※
- 今枝愛貞  
道元 坐禅ひとすじの沙門 同 ※
- 笠原一男  
親鸞 煩惱具足のほとけ 同 ※
- 飯島宗平編  
キルゲゴールの講話遺稿集9 新地書房※
- 丸山孝一  
カトリック土着 日本放送出版協会※
- 真野俊和  
旅のなかの宗教 同 ※
- 笠原一男  
日本史にみる地獄と極楽 同 ※
- 大森荘蔵  
流れとよどみ 産実図書
- G.E.ヒューズ  
標榜論入門 恒星社厚生閣
- 湖浅泰雄  
古代人の精神世界 ミネルヴァ書房※
- 日本人の宗教意識 名著刊行会※
- 木田元 現代哲学 日本放送出版協会※
- 東洋人の行動と思想  
6 孟子—その行動と思想— 評論社※
- 9 李白と杜甫—その行動と思想— 同 ※
- 近代日本思想史大系  
7 近代日本法思想史 有斐閣
- ワイトゲンシュタイン全集  
2 哲学的考察 大修館書店
- 世界の思想家  
23 ワイトゲンシュタイン 平凡社※
- 講座現代の心理学  
1 心とはなにか 小学館※
- 5 認識の形成 同 ※
- 7 個人・集団・社会 同 ※
- 8 文化と人間 同 ※
- NHKブックス  
35 神・現代に生きるもの 日本放送出版協会※
- 48 日本密教 同 ※
- 66 日本人の無常観 同 ※
- 99 臨終 同 ※
- 111 原始仏教 同 ※
- 195 仏教土着 同 ※
- 日本思想大系  
41 三浦梅園 岩波書店
- 46 佐藤一斎・大塩中斎 同

歴史

- 現代世界詳細地図 全教図
- 現代日本分県地図 同
- 日本庶民生活史料集成30 三一書房※
- 中国歴史地図集 中華地理学社※
- 河川湖沼の歴史地理 今古書院※
- 徐弘祖 徐霞客遊記上・下・附図 上海古籍出版
- 谷岡武雄  
新訂地理実習 大明堂
- 鈴木秀夫  
森林の思考・砂漠の思考  
日本放送出版協会※
- 遠九立 死の文化史 泰流社※
- 李進熙 日本文化と朝鮮 日本放送出版協会※
- 藤山康彦  
北京の史蹟 平凡社※
- 中野好夫  
人間の死にかた 新潮社※
- 玉城哲 風土・大地と人間の歴史 平凡社※
- 伊藤貞夫  
百典期アテネの政治と社会 東京大学出版会※
- 端淳一 地図の風景 九州編0 熊本・大分・宮崎  
そして  
同 同 鹿児島 沖縄 同
- ルイス・フロイス  
日本史9~12 西九州編1~4  
中央公論社
- 日本の山河  
43 天と地の旅 秋田 国書刊行会※
- 体系日本書  
5 対外関係史 山河出版社※
- 日本歴史地名大系  
2 青森県の地名 平凡社※
- 35 広島県の地名 同 ※
- 角川日本地名大辞典  
26 京都府 上・下 角川書店※
- 中国の旅  
1 北京とその周辺 講談社※
- NHKブックス  
85 米食肉食の文明 日本放送出版協会※
- 147 稲作以前 同 ※
- 270 民衆史としての東北 同 ※
- 日本都市生活史料集成  
1 三郡篇 学習研究社※

石田秀 CP/Mの使い方・マイクロコンピュータ OS 彦報出版  
 R.W. Hamming デジタルフィルタ 科学技術出版社  
 E.Oran Bringham 高速フーリエ変換 同  
 日本機械学会編 機械用語集 日本機械学会  
 大久保保一 機械に知力をつける制御用マイコン・初歩から応用まで 日刊工業新聞社  
 川田雄一 材料力学 堂幸房楽  
 中川秀太郎 材料力学入門 大河出版  
 小栗富士彦 回転軸設計ガイドブック 共立出版  
 渡辺茂 設計論 岩波書店  
 大西清 機械技術者のための設計管理の実務 オーム社  
 中野有明 入門超低周波音工学 技術書院  
 堀部彦 マイクロコンピュータ活用事典 テクノ  
 真壁昭昭 FM-8システムアーキテクチャーとプログラミング技術 共立出版  
 菅野充 電磁気計測 コロナ社  
 田中広 マイコンプログラミング500題 日刊工業新聞社  
 大西正和 実用BASIC 同  
 R.クスタフソン 新しい発振技術 森北出版  
 倉林俊雄 工業熱力学 朝倉書店  
 森山勉吉 高品質を新りだす測定工具の使い方かし方 技術評論社  
 佐々木野一 機械工作標準化マニュアル 同  
 卯月秀晃 はじめて学ぶ機械現場の作業計算 同  
 S.Muroga 論理設計とスイッチング理論 共立出版  
 中西正和 アセンブリプログラミング6502 培風館  
 半沢進 マイコン機械法入門 同  
 柏木恭忠 BASICで広がる世界 CQ出版社  
 F.P.ペアー 工学のための力学・上・下 ブレイン図書出版  
 根本和泰 社会アセスメント原子力火力立地 武蔵野書房  
 ニール・オロフ 市民のための環境アセスメント行動指針 同  
 林智 環境アセスメント研究ノート 同  
 高橋三雄 パソコン徹底活用法 学研社  
 結章 大学国語・水力学 丸善  
 横山重吉 わかる水力学演習 日新出版  
 M.グロブトビッチ ロボットの手 力学と運動 日刊工業新聞社

竹内洋一郎 熱力学 日新出版  
 ニコラスP.チロニス 実用メカニカルコントロール2~4 大河出版  
 O.C.フィエンキーヴィツ 基礎工学におけるマトリックス有限要素法 培風館  
 東京電機大学編 電気機械の初歩 東京電機大学出版局  
 原子力工学シリーズ  
 1 原子炉構造工学 東京大学出版会  
 3 原子力プラントの構造設計 同  
 6 原子力熱力学 同  
 8 照射損傷 同  
 9 放射線計測理論 同  
 ブルーバックス  
 488 あいまい工学のすすめ 講談社  
 489 エンジンの再発見 同  
 491 エレクトロニクスからの発想 同  
 493 コンピュータ用語辞典 同  
 494 カタログ学入門 同  
 495 人間工学からの発想 同  
 496 知識工学入門 同  
 501 オートバイの科学 同  
 502 マイビデオ入門 同  
 自転車科学 同  
 1種情報処理受験シリーズ  
 1 コンピュータアーキテクチャ オーム社  
 2 COMP-Xプログラミング 同  
 3 プログラム設計作成 同  
 4 システムとプログラム設計 同  
 5 オンラインシステム 同  
 6 経営科学とOR 同  
 工学基礎講座  
 18 計数測定 培風館  
 わかりやすい環境アセスメントシリーズ  
 8 下水道計画論 武蔵野書房  
 土木工学大系  
 1 土木工学概論 彰国社  
 3 自然環境論II 同  
 7 連続体力学 同  
 17 プロジェクトマネジメント 同  
 25 交通 同  
 現代測量学  
 2 測量計測概論 日本測量協会  
 3 一般測量 同  
 新土木工学  
 90 水工学 技報堂出版  
 新体系土木工学  
 26 水文学理論的手法とその応用 同  
 35 プレストレストコンクリート構造物の設計と施工 同  
 49 社会資本と公共投資 同  
 63 道路計画論 同  
 75 タムの設計 同  
 78 タムの施工 同  
 100 建設機械 同  
 The 3rd Photovoltaic Science and Engineering 第3回光起電力効果の基礎と応用に関するシンポジウム運営委員会 Thomas Thlford Engineer T.T.L  
 H.Max Irvine Cable Structures The MIT Press  
 G.Goos Lecture Notes in Computer Science Logic of programs Springer Verlag

Dale W. Fitting Ultrasonic Spectral Analysis for Nondestructive Evaluation Plenum  
 Tony Dudley Evans Engineering Longman  
 同 Teachers Notes 同  
 Robert D.Cook Concepts and Applications of finite Element Analysis Wiley  
 C.A.Brebbia Progress in Boundary Element Methods vol 1 Pentech Press  
 Fatigues Composite Materials ASTM  
 Edward Cohen Long-Span Bridges O H Amsenn Centennial Conference Ann N.Y.Acad Sci  
 A First Course in Technical English Students Book 1, 2 HEB  
 YH Pao Elastic Waves and Non Destructive Testing of Materials ASME  
 B.Dórnolki Mathematical Logic in Computer Science North-Holland  
 Geoffrey Broughton A Technical Reader for Advanced Students Collier Macmillan  
 Engineering i.Civil and Mechanical Engineering 同  
 Technical English Reader 1 同  
 Inter-Noise 81 practice of Noise Control Engineering vol.1,2 Oxford  
 P.K.Banerjee Boundary Element Methods in Engineering Science Mc Graw-Hill  
 Beams plates and Shells 同  
 Effect of Load Spectrum variables on Fatigue Crack Initiation and Propagation STP  
 Ovidia E.Lev Structural Optimization ASCE  
 Editor C.J.Becuers The Measurement of Crack Length and Shape During Fracture and Fatigue EMAS  
 Fatigue and Microstructure ASM  
 Cyclic Stress-Strain and plastic Deformation STP  
 James J.Duderstadt Principles of Engineering Wiley  
 C.Taylor The Navier-Stokes Equations pineridge press  
 W.E.Flood An Elementary Scientific and Technical Dictionary Longman  
 産 業  
 改正電波法令解説書 電波タイムス社  
 木材工学辞典 工業出版  
 伊藤貞夫 百典期アテネの政治と社会 東京大学出版会

川田 信一朗  
水稲の穂 豊山蔭村文化協会  
NHK ブックス  
294 日本のサケ 日本放送出版協会

## 芸 術

中国 繪画史図録・上 上海人民美術出版社  
丸山吉五郎  
船上競技入門 講談社  
金子朋友  
体操競技・男子種 同 余  
高橋進 中長距離走 同 余  
古橋廣之進  
水泳 同 余  
宮井国夫  
ラグビー、フットボール 同 余  
八重樫茂生  
サッカー 同 余  
鈴木征 ソフトボール  
松平康隆  
バレーボール 同 余  
糸山博司 バスケットボール 同 余  
石風賢 テニス 同 余  
井上早苗  
レデ、ステニス 同 余  
塚本一 バトミントン 同 余  
萩村伊智朗  
卓球世界のプレー 同 余  
島根夫 登山  
紺野晃 オリエンテーリング  
梅野尾昌一  
バトミントクリニック 同  
K.ローズウォール  
ローズウォールのテニス 同  
生沼スミエ  
バレーボール教室 同  
ジャック・ニクラウス  
ニクラウスのゴルフ 同  
西山豊 フライフィッシング 同  
日比野弘  
ラグビールールハンドブック 同  
サッカールールハンドブック 同  
マレック  
ショパン・その実像 東京創元社  
実践コーチ教本  
1 コーチのためのトレーニング科学 大塚書店  
2 コーチのためのスポーツ医学 同  
3 コーチのためのスポーツ人間学 同  
日本古美術全集  
19 山陰・山陽の古寺 集英社  
21 本願寺と知恩院 同 余  
日本新書人名百集  
1 浅井忠 第一法規出版  
2 石井柏亭 同 余  
3 竹久夢二 同 余  
5 中西利雄 同 余  
6 名作選1(明治) 同 余

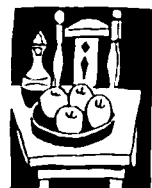
## 語 学

改訂版現代日中辞典 光生館  
新英和大辞典 第五版 研究社  
英用例事典<文型> 日本図書ライブ

現代英和辞典 開拓社  
日英故事ことわざ事典  
アサヒブニングニュース社  
故事俗信ことわざ大辞典 小学館  
漢日辞典 吉林人民出版社  
現代カタカナ語辞典 日本英語教育協会  
英語辞書の比較と分析 第1,2集 研究社  
新日漢辞典・コンパクト版 東方書店  
シリアル・ピーチング  
人名をルーツにした英語  
アサヒブニングニュース社  
E・ヴ・イス  
文脈で意味をとらえる英単語問題集 2000  
オックスフォード大学出版局  
諸橋轍久他  
廣漢和辞典・中・下巻 大塚書店  
千島栄一  
言語学のたのしみ 同 余  
石原明  
発音アクセントスベリング102 日本英語教育協会  
竹林道 英語のフォニックス ジャパンタイムズ  
山本直三  
日本語ワードプロセッサの活用法  
オーム社  
堀内克明編  
新聞雑誌を読むための最新時事英語辞典 旺文社  
J. B. Heaton  
ロングマン英語前置詞副詞活用辞典  
秀文インターナショナル  
新訳漢文大系  
55 淮南子中 明市書院  
きけわだつみのこえ1, 2集 光文社  
池田亀雄  
宮廷女流日記 全文章  
マフムト・マカル  
トルコの村から もしおぶくず  
橋本浩一郎  
近代文学ノート みすず書房  
食片みぢみ編  
三ヶ島観子日記 上、下 全芸出版社  
大塚幸男  
比較文学原論 白水社  
津田孫一  
四季 文京書房  
砂時計  
陸奥臣 北京の旅 平凡社  
合坂元昭  
仏教文学の世界 日本放送出版協会  
永井路子  
悪童列伝 毎日新聞社  
百目鬼三郎  
奇談の時代 同 余  
前野玄彬  
中国文学序説 東京大学出版会  
福原麟太郎随想全集  
1 人生の知恵 福武書店  
2 本棚の箱の橋子 同 余  
3 春のてまり 同 余  
4 学問のすかた 同 余  
5 メリ・イギリスランド 同 余  
6 この国をよま 同 余  
7 思い出の記 同 余

## 文 学

講座夏目漱石  
1 漱石の人と周辺 有斐閣  
2 漱石の作品 上 同 余  
3 同 下 同 余  
4 漱石の時代と社会 同 余  
5 漱石の知的空間 同 余  
編集 中国文学  
3 日記文学作品論の試み 電間書院  
日本文学古註釈大成 日本図書センター  
ロマン罗兰全集  
11 フランス革命劇M みすず書房  
18 政治論 同 余  
31 日記 同 余  
41 精神の独立 同 余  
42 タゴールとロマン罗兰・ガンジーとロマン罗兰 同 余



## 当館のあゆみ

57.6 ~ 57.10

- |      |                                      |         |                       |
|------|--------------------------------------|---------|-----------------------|
| 6.28 | 第2回図書委員会 —— 努力目標その他                  | 8. 1 から | 館内壁塗装 19日まで           |
| 7. 5 | 定期図書検閲 12日まで                         | 8.20 から | 夏休み特別開館               |
| 7. 7 | 教官会議で、学生用図書購入費配分案が承認された。             | 9.16    | 第3回図書委員会<br>ビブリア編集案など |
| 7. 7 | 第2回学生図書委員会<br>1. 協力の方法<br>2. 希望図書の呈出 | 9.21    | ビブリア号外（紛失図書探し）を配布     |